

やまがた

元氣

農の風

NO.20

山形県南陽市

南陽市ワインブドウ研究会会長

すとう

須藤

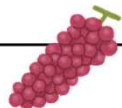
こういち

孝一さん

～ 十分一山の耕作放棄地再生を目指し、醸造用ぶどうを栽培する南陽市のプロジェクトに取り組みました～



南陽市



耕作放棄地に醸造用ぶどうを栽培することになった
きっかけや思いをお聞かせください。



南陽市十分一山（じゅうぶいちやま）の耕作放棄地を再生し、美しかった景観を復活させたいという、南陽市ワインブドウ研究会と行政の思いがひとつになったことが、耕作放棄地に醸造用ぶどうを栽培することになったきっかけです。

平成31年に始めた取組は、地元のぶどう農家・酒販売店・高校や南陽市と連携し、15aに4種の醸造用ぶどう苗木を新植し肥培管理するところから行い、令和3年には初収穫したぶどうのみを使用したワインが完成し、ぶどう栽培からワインの製造、販売まで一貫して行うことができました。



地域が連携し作り上げた
ワイン
(画像提供：南陽市)



南陽市ワインブドウ研究会
会長 須藤 孝一さん



ぶどうを栽培するうえで大変
だったことをお聞かせください。

十分一山は、南向き斜面のため日当たり良好で日照時間も長く、昼夜の寒暖差があるなど、ぶどう栽培に適しています。

しかし、礫質のため土が少なく、掘り起こせばすぐ石に当たるため、ぶどうの根の張りが悪い。特に新植して1～2年の幼木には手がかかり、樹木枯れを防ぐための急斜面での水やり作業は、軽トラックの荷台に水を入れたタンクを積んで何度も往復しなければならず大変でした。また、去年は鳥やハクビシンによる食害が増加し、電気柵の設置などの対策も必要と考えています。



十分一山の風景
(令和4年7月25日現在)



今後の活動や夢を
お聞かせください。

今後は、ワインブドウ研究会が醸造用ぶどうの栽培方法についての指導役となり、醸造用ぶどうは生食用ぶどうと比べて、栽培の手間がかか



意見交換の様子

らないという利点を地元のぶどう農家に知っていただき、将来的には十分一山の耕作放棄地に醸造用ぶどうの栽培が拡大し、ワイン産業の振興に繋がり、更に十分一山の景観復活に一役を担えればと思っています。

